

Title	功利主義倫理学とパーソナル・インテグリティ
Sub Title	Utilitarianism and personal integrity
Author	成田, 和信(Narita, Kazunobu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1994
Jtitle	哲學 No.97 (1994. 7) ,p.41- 63
JaLC DOI	
Abstract	Utilitarianism has recently been the object of criticism based on the concept of personal integrity. I will offer a utilitarian defense against this criticism. The point of the criticism is that utilitarianism cannot account for the moral significance of personal integrity. Utilitarianism is alleged to require one to take the utilitarian impersonal point of view. Seen from this point of view, any value which is attached to things only from the personal point of view is discounted. As a result, utilitarianism prevents one from keeping one's own personal integrity which is formed from nothing but one's own personal point of view. I take this criticism seriously since it seems to raise some difficulties with utilitarianism. I will respond to this criticism by presenting what can be called hierarchical motivation utilitarianism. Hierarchical motivation utilitarianism permits one to take the personal point of view on at least one motivational level, and thus enables one to keep one's personal integrity on that level. Therefore, it shows a utilitarian way of accomodating the moral significance of personal integrity and meeting the difficulties raised by the personal integrity based criticism.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

功利主義倫理学とパーソナル・  
インテグリティ

成 田 和 信\*

**Utilitarianism and Personal Integrity**

*Kazunobu Narita*

Utilitarianism has recently been the object of criticism based on the concept of personal integrity. I will offer a utilitarian defense against this criticism.

The point of the criticism is that utilitarianism cannot account for the moral significance of personal integrity. Utilitarianism is alleged to require one to take the utilitarian impersonal point of view. Seen from this point of view, any value which is attached to things only from the personal point of view is discounted. As a result, utilitarianism prevents one from keeping one's own personal integrity which is formed from nothing but one's own personal point of view.

I take this criticism seriously since it seems to raise some difficulties with utilitarianism. I will respond to this criticism by presenting what can be called hierarchical motivation utilitarianism. Hierarchical motivation utilitarianism permits one to take the personal point of view on at least one motivational level, and thus enables one to keep one's personal integrity on that level. Therefore, it shows a utilitarian way of accommodating the moral significance of personal integrity and meeting the difficulties raised by the personal integrity based criticism.

\* 慶應義塾大学商学部助教授 (倫理学)

この小論では、パーソナル・インテグリティ *personal integrity* という概念に基づいて提出されている功利主義倫理学（以下功利主義と略す）批判がどのような問題を功利主義に投げ掛けているか、そして、その問題を功利主義の枠の中でどのように受け止めることができるか、ということ考察してみたい。

パーソナル・インテグリティという概念に基づく功利主義批判を展開している中心的な人物として、バーナード・ウィリアムズを挙げるができるであろう。バーナード・ウィリアムズは *Utilitarianism For and Against* の第二部でパーソナル・インテグリティという概念に基づく功利主義批判を展開し、<sup>(1)</sup> さらに、“Persons, Character and Morality”の中でその批判をより深めている。<sup>(2)</sup> その後、この批判は哲学者たちによって何度も取り上げられ検討されてきた。<sup>(3)</sup> この批判の主旨は、功利主義の枠組の中ではパーソナル・インテグリティは尊重されない、というものである。

ところで、この批判に対して功利主義の側から、パーソナル・インテグリティの保持を一種の功利とみなすことによって功利主義の枠組の中でもパーソナル・インテグリティをある意味で尊重することができる、という反論が出されるかもしれない。たとえば、快や欲求の満足といった心理的な状態だけを唯一の功利とみなす一元的功利主義の他に、友情や愛情に基づく人間の交わり、自分のプロジェクトの実現、それらのプロジェクトの実現に必要な自由や財なども功利とみなし、これら多様な功利の増大を目指す多元的功利主義という考え方がある。<sup>(4)</sup> パーソナル・インテグリティの保持も一つの功利としてこのような多元的功利主義の中に組み込めば、パーソナル・インテグリティは功利主義の枠組の中で尊重されることになる。<sup>(5)</sup>

しかし、私は、パーソナル・インテグリティに基づく批判が問題にしているパーソナル・インテグリティの尊重は、パーソナル・インテグリティ

の保持を一種の功利とみなすことで済ますことができるようなものではない、と考えている。そして、その理由は、功利主義が要請する非人称的 impersonal な視点とパーソナル・インテグリティの形成に欠かせない人称的 personal な視点との相違と対立に存する、と理解している。つまり、パーソナル・インテグリティを一種の功利とみなすことではパーソナル・インテグリティに基づく批判を回避することができないのは、パーソナル・インテグリティを一種の功利とみなすという態度のうちすでにパーソナル・インテグリティの形成や保持とは相入れない非人称的な視点が含まれているからなのである。では、功利主義の基本的な主張を保持しつつこのような批判を回避する道はまったくないのであろうか。私は、人称的な視点と非人称的な視点の二つを功利主義的な動機付けの過程の中で調和させることの中に、回避の一つの道があると考えている。この回避の道を具体的に描くことによって、パーソナル・インテグリティに基づく批判に対する功利主義の側からの対処の仕方を示すことが、この小論の目的である。

第一節では、パーソナル・インテグリティとは何かということ、ウィリアムズの叙述に基づいて説明する。その際に、パーソナル・インテグリティと人称的な視点との関係を特に強調する。第二節では、パーソナル・インテグリティに基づく批判が功利主義に対して提起する問題は功利主義が要請する非人称的な視点から発するという認識を提示し、さらに、その認識に立った上でそれらの問題がどのようなものであるかを示す。第三節では、功利主義と「階層的動機付け」という考え方を結び付けることによって、非人称的な視点と人称的な視点の両方を功利主義の枠組の中に組み込むことができるということを示す。さらに、そうすることによって、第二節で示された問題に功利主義の立場からどのように答えることができるかを考える。第四節では、第三節で示した考え方に対してパーソナル・インテグリティを重視する立場から出されることが予想される問題を示し、

それらの問題をどのように解消できるかを検討する。

## 1

この節では、この小論で問題となるパーソナル・インテグリティとはどのようなものであるのか、ということについて述べたい。パーソナル・インテグリティとは何かということに関しては様々な理解が可能であろう。<sup>(6)</sup>ここでは、ウィリアムズがパーソナル・インテグリティに与えている説明を私なりに解釈し整理したものを土台に議論を進めていきたい。

パーソナル・インテグリティとは何かということに関するウィリアムズの説明は、次のように要約できるであろう。人々は様々な目標を持ち、他者と様々な関係を保ちながら生きている。そのような目標や関係の中には、個人にとって特別の価値を持ち、その個人の生活や人生に特別の意味を与え、その個人の生きがいになっているものがある。ウィリアムズは、それをグラウンド・プロジェクト *ground project* と名付けている。<sup>(7)</sup>そして、そのグラウンド・プロジェクトを中心に、相互に関連し補完し合う様々な目標、欲求、感情、動機や行為などの要素がひとつのまとまりを形成している。このまとまりが、パーソナル・インテグリティである。<sup>(8)</sup>

このようなパーソナル・インテグリティの形成と保持には、非人称的な視点ではなく、人称的な視点が重要な役割を果す。<sup>(9)</sup>人称的な視点とは、特定の個人が持つその個人に特有の視点である。その視点は、他の個人と共有することはできない。一方、非人称的な視点とは、特定の個人の視点ではなく、任意のいかなる個人も取ることができるような視点である。つまり、この視点は、個々の人称的な視点を越えた共通の視点である。二つの視点の相違を価値評価との関連で述べると次のようになる。ある物事を非人称的な視点から見ると、異なる個人がその物事に関して行う価値評価の相違はすべて捨象され、個々の個人の視点を越えた共通の尺度でその価値が測られる。一方、人称的な視点から見ると、非人称的な視点からは同

一の価値を持つものとみなされる物事にも、個人によって異なる価値が与えられることがある。

さて、ある個人のパーソナル・インテグリティの構成要素は、その個人に特有の視点から見て初めて現れるような価値を持っている。そして、パーソナル・インテグリティの構成要素は、そのような価値を通して互いに結び付き、ひとつのまとまりをなしている。一方、非人称的な視点から見た場合、ある個人のパーソナル・インテグリティの構成要素は、他の様々な個人のパーソナル・インテグリティの構成要素と同じ価値基準で測られるような価値しか持たなくなる。したがって、それらの構成要素がそのパーソナル・インテグリティの中でのみ持ち得るような価値は捨象される。その価値が捨象されると、それらの構成要素は（そのパーソナル・インテグリティの中で保っていた）相互の関連を失い、その結果そのパーソナル・インテグリティは崩壊する。このように、パーソナル・インテグリティの形成と保持は、人称的な視点からなされるのであり、その視点を離れ非人称的な視点を取るとパーソナル・インテグリティは崩壊するのである。以上が、ウィリアムズのパーソナル・インテグリティに関する説明の要約である。

## 2

この節では、前節で示したパーソナル・インテグリティという概念が功利主義に対してどのような問題を提起しているかを考えてみたい。

パーソナル・インテグリティに基づく功利主義批判を支える基本的な考え方は、次のようなものである。前述のように、パーソナル・インテグリティやその構成要素に特有の価値は、人称的な視点から見て初めて現れるものである。そして、その価値が捨象されると、それらの構成要素相互の関連が失われ、その結果パーソナル・インテグリティが崩れてしまう。ところで、功利主義は、物事の価値を一般的功利の増大にどれだけ貢献する

かという基準によって測る。そして、この一般的功利は、個々の人称的な視点を越えた共通の視点から捉えられ、その増減は個々の人称的な視点を越えた共通の尺度で測られる。つまり、功利主義においては、物事の価値は非人称的な視点から見られ、非人称的な基準によって測られる。たとえば、ある個人が哲学の探求をグラウンド・プロジェクトとしていたとしよう。そして、その個人のパーソナル・インテグリティがそのグラウンド・プロジェクトを中心に形成されていたとしよう。すると、哲学の探求やその探求から生ずる欲求やその探求に必要な行為など（といったパーソナル・インテグリティの構成要素）は、その個人の視点から見ると、特有の価値を持って現れてくる。しかし、功利主義的な視点から見れば、そのグラウンド・プロジェクトやそれらの構成要素の価値は、あくまで一般的功利の増大との関係で決まってくる。そして、一般的功利の増大という価値基準は、特定の個人の視点から設定されるのではなく、その視点を越えた共通の視点から設定される。したがって、ある行為（たとえば、カントを読むということ）がその人のパーソナル・インテグリティの中で特別な価値を持っていたとしても、それが一般的功利を生み出さなければ、その行為は、功利主義的な視点から見れば、何の価値も持たないことになるし、また、その行為が一般的功利をある程度生み出すとしても、一般的功利を同じ程度生み出す他の任意の物事と同じ価値を持つにすぎない。このように、功利主義的な視点から見ると、そのパーソナル・インテグリティやその構成要素に特有の人称的な価値は捨象される。そして、そのような特有の価値が捨象されると、その価値を通してまとまりを形成していたパーソナル・インテグリティの構成要素はばらばらになり、そのパーソナル・インテグリティが解体してしまう。つまり、功利主義は、非人称的な視点を要請することによって、人々が自分のパーソナル・インテグリティを形成し保持することを阻止するのである。<sup>(10)</sup>

以上のように、パーソナル・インテグリティに基づく功利主義批判を支

える基本的な論点は、功利主義は非人称的な視点を要請するので、その結果パーソナル・インテグリティの形成と保持を阻止する、というものである。しかし、この論点をただ繰り返すだけでは功利主義に対する手痛い批判にはならないであろう。というのは、非人称的な視点の採用がパーソナル・インテグリティの解体をもたらすとしても、そのどこに問題があるのか、そもそもパーソナル・インテグリティを多少犠牲にしても守らなければならないのが道德の要請というものである、と功利主義の側から切り返すことができるからである。したがって、この論点が功利主義に対する手痛い批判となるためには、さらに話しを進めて、それが功利主義に対して（そのような切り返しが効かなくなるような）厄介な問題を突き付けているということを示さなければならない。私は、そのような厄介な問題が少なくとも三つあると考える。

第一の問題は次のようなものである。道德の理論は実践的な理論である。したがって、ある理論が道德の理論としての資格を持つためには、その理論が要請する行為へと人々を動機付けることができなければならない。さて、人間の行為の動機の主要な源泉は、パーソナル・インテグリティやその構成要素への愛着やコミットメントにある。しかし、功利主義はパーソナル・インテグリティの形成と保持を阻止する。したがって、功利主義は道德の理論としての資格を失う。<sup>(11)</sup>

第二の問題は次のようなものである。道德の理論は、人間を対象とする理論である。したがって、ある理論が道德の理論としての資格を持つためには、少なくとも人間の本性を反映していなければならない。ところで、人間は、その本性上、人称的な視点を取らざるを得ない存在者である。パーソナル・インテグリティを持つことは、そのような人間の本性の典型的な現れである。しかし、功利主義は人称的な視点を排除する。さらに、その結果パーソナル・インテグリティの解体をもたらす。つまり、功利主義は人称的な視点を取るという人間の本性を反映できない。したがって、功



利主義は道德の理論としての資格を失う。<sup>(12)</sup>

第三の問題は次のようなものである。パーソナル・インテグリティは、人々に幸せな生活を提供する。そして、パーソナル・インテグリティの中心となるグラウンド・プロジェクトは、人々に生きがいを与え、人々の生活を充実したものにする。また、そのような生活を続ける人々は周囲の人々にも幸福や喜びを与える。したがって、人々がパーソナル・インテグリティを保持しつつ生活している状態は、功利主義が本来目指すべき状態である。しかし、功利主義は、人々がパーソナル・インテグリティを形成し保持することを阻止する。したがって、功利主義は、それに従おうとすればそれが目指すべき状態を実現できないというパラドックスに陥る。<sup>(13)</sup>

以上、この節の冒頭で述べたパーソナル・インテグリティに基づく批判の基本的な論点が功利主義に対して提起し得る厄介な問題を三つだけ示した。もちろん、これらの問題が成り立つために必要な前提がすべて正しいとはかぎらない。たとえば、道德の理論はそれ自体で動機付けの力を持っていなければならないとか、道德の理論は人間の本性を反映していなければならない、という（道德の理論の条件に関する）前提については議論の余地があるであろう。また、パーソナル・インテグリティが人間の行為の動機の主要な源泉であるとか、パーソナル・インテグリティは人間の本性を反映しているとか、そして、パーソナル・インテグリティは人々に幸福な喜びのある生活を提供しているといった（経験的な）前提も吟味する必要があるであろう。しかし、ここでは、これらの前提を一応認めた上で、以上の三つの問題を功利主義の枠の中でどのように受け止めることができるかを考察してみたい。

### 3

この節では、ピーター・レイルトンが提出している「洗練された sophisticated」功利主義者という考え方を取り上げて、それを「階層的な動

機付け」と呼ぶことができるような動機付けのシステムによって解釈してみたい。さらに、そうすることによって、前節で述べた三つ問題に対する功利主義の側からのひとつの対処の仕方を示したい。

レイルトンによれば、<sup>(14)</sup> 功利主義は、一般的功利の増大に実際につながるような生き方を人々に要請する道徳の理論である。ところで、功利主義的思考によって常に行為を選択するような生き方が必ずしも一般的功利の増大につながるとはかぎらない。功利主義的思考による行為の動機付けが一般的功利の増大につながらない時には、功利主義は、功利主義的思考を動機に行為すること——つまり、功利主義的思考によって行為を選択すること——を要請せず、一般的功利の増大に実際につながるような他の動機に基づいて行為することを要請する。このレイルトンの見解によれば、自分がこれから行おうとする一つひとつの行為を功利主義的に吟味しそれに基づいて行為を決定するような生き方よりも、たとえば自分が熱中していることに没頭する生き方の方が実際に一般的功利の増大につながるとすれば、後者の生き方が功利主義の要請に合った生き方になるのである。

レイルトンは、功利主義の要請に合ったこのような生き方をしている人を「洗練された」功利主義者と呼んでいる。今述べたように、洗練された功利主義者は、一般的功利の増大に実際につながる生き方を選ぼうとしている人である。そして、自分の生き方が一般的功利の増大につながらないということがわかれば、自分の生き方を修正し、なるべく一般的功利の増大に実際につながるような生き方をしようという用意がある人である。したがって、功利主義的思考によっていちいち行為を選択する生き方が実際に一般的功利の増大をもたらさないということがわかれば、洗練された功利主義者はそのような生き方を選ばず、一般的功利の増大をもたらさような他の生き方を選ぶであろう。しかし、洗練された功利主義者は、そのような他の生き方を選んだ後も、その新たな生き方が一般的功利の増大に

実際につながるかどうかを監視する視点を常に脳裏のどこかに据えている。そして、もしその生き方も一般的功利の増大に実際につながらないということがわかってきたら、さらに他の生き方を試してみようという心構えを持っている。

私は、このような洗練された功利主義者の動機付けのあり方をバーバラ・ハーマンなどが提示している「階層的な動機付け」と呼ぶことができるような動機付けのシステムによって描き直すことができる、と考える。<sup>(15)</sup> 階層的な動機付けとは、レベルの異なるいくつかの動機による複合的な動機付けのことである。階層的な動機付けを構成するためには少なくとも、一次的動機 *first-order motive* と二次的動機 *second-order motive* が必要である。一次的動機とは直接行為を引き起こす動機である。つまり、行為の直接の動機となるような動機のことである。一方、二次的動機とは、直接行為を引き起こす動機ではなく、一定の一次的動機に基づいて行為しようという心構えとして働いたり、あるいは、一定の一次的動機に基づいて行為しないでおこうという心構えとして働くような高次の動機 *higher-order motive* である。たとえば、親切な人でありたいという動機を二次的動機としても持っている人を考えてみよう。その人は、自分がこれから行おうとする行為が親切な行為かどうかということを一いち判断し、その判断に基づいて行為を選択するとはかぎらない。つまり、その人のあらゆる行為の直接の動機——つまり、一次的動機——が親切でありたいという動機であるとはかぎらない。むしろ、その人のそれぞれの行為の一次的動機は、それ以外の多様な感情や欲求や思考かもしれない。しかし、その人は、何の制約もなくそれらの一次的な動機に身を任せるわけではない。たとえば、それらの動機のあるものに基づいて行為すると往々にして他人に不親切になってしまうということがわかってきたら、その人は、なるべくその動機に基づいて行為することを避けようと思うであろう。そして、親切な行為に導くような他の動機に基づいて行為しようと思うのである

う。このように思うのは、その人が二次的動機として親切な人になりたいという動機を持っているからである。

さて、レイルトンが描いている洗練された功利主義者を以上のような階層的な動機付けという考え方をによって描き直してみよう。洗練された功利主義者は、一次的な動機のレベルでは必ずしも功利主義的な思考を動機として採用するわけではない。その人は、一次的動機としては多様な動機を持ち、それに基づいて行為する。そして、その動機は人称的な視点から採用された動機であってもかまわない。しかし、その人は、二次的な動機のレベルでは功利主義的な思考を常に行っている。つまり、その人は一般的功利の増大をもたらすような一次的動機に基づいて行為しようという二次的動機を常に持っているのである。したがって、その人の二次的な動機のレベルでは、功利主義的な視点が（したがって非人称的な視点が）常に取られているのである。

そこで、このような階層的な動機付けのあり方を要請する功利主義の理論を考えてみよう。そして、仮にこの理論を「階層的動機付け功利主義」と名付けておこう。さて、この階層的動機付け功利主義を採用すれば、前節で示したパーソナル・インテグリティが提起する三つの問題に対処することができるのではないか。第一の問題には次のように答えることができる。階層的動機付け功利主義は、二次的な動機のレベルでは非人称的な視点を取ることを要請するが、一次的な動機のレベルではそのようなことを要請しない。したがって、階層的動機付け功利主義を採用する人は、パーソナル・インテグリティの構成要素への愛着やコミットメントから生ずる動機を一次的動機として持つことができる。したがって、たとえそのような愛着やコミットメントが人間の行為の動機の主要な源泉であるとしても、階層的動機付け功利主義は動機付けの力を失うことはない。

第二の問題には次のように答えることができる。階層的動機付け功利主義を採用しても、一次的な動機のレベルでは人称的な視点を取ることは

可能である。したがって、階層的動機付け功利主義は、人稱的な視点を取ることが人間の本性であるとしても、その本性を反映することができる。

第三の問題には次のように答えることができる。階層的動機付け功利主義は、一次的な動機のレベルで人稱的な視点を許容し、その結果そのレベルでパーソナル・インテグリティを保持することを可能にする。したがって、階層的動機付け功利主義を採用しても、パーソナル・インテグリティが生み出す幸福や喜びを失うことはない。したがって、階層的動機付け功利主義はパラドックスに陥ることはない。

#### 4

前節では階層的動機付け功利主義という考え方を提出し、それによってパーソナル・インテグリティに基づく批判が功利主義に対して提起する三つの問題に対処しようとした。しかし、パーソナル・インテグリティを重視する立場から見れば、階層的動機付け功利主義という考え方にもまだ問題があるであろう。そこで、この節では、その立場から見ると、どのようなところに問題があるのか、そして、その問題をどのように解消することができるかを検討してみたい。

たとえば、パーソナル・インテグリティを重視する立場から、次のような問題が出されるかもしれない。階層的動機付け功利主義は、確かに一次的な動機のレベルで人稱的な視点を許容し、そのレベルでのパーソナル・インテグリティの保持を可能にするかもしれない。しかし、そのレベルで許容される一次的動機は何らかの仕方で一般的功利の増大をもたらすような動機に限られる。というのは、階層的動機付け功利主義を採用した場合、功利主義的な二次的動機が働いて、一般的功利の増大をもたらすような動機だけが一次的な動機のレベルで選択されるからである。したがって、この理論が許容するパーソナル・インテグリティの範囲は極度に狭いものになる。

この問題に対しては、次のように答えることができる。二次的な動機のレベルで働く功利主義的な思考には事実上様々な限界がある。<sup>(16)</sup> たとえば、どのような一次的動機が実際に一般的功利を増大させるかを正しく予測することは非常に難しい。また、それぞれの一次的動機すべてを功利主義的な思考によっていちいち吟味した場合に費やされる時間と労力を考えると、功利主義的な思考によって常に一次的動機を選択することが実際に一般的功利の増大につながるかどうかはかなり疑問である。階層的動機付け功利主義を採用した人は、以上のようなことを考慮して、一般的功利に明らかに反するような一次的動機を除いて、たいていの一次的動機は許容するであろう。したがって、階層的動機付け功利主義が許容するパーソナル・インテグリティの範囲が極度に狭くなるようなことはない。

この問題に関しては、さらに続けて次のようにも答えることができる。今述べたように一つひとつの一次的動機が一般的功利に及ぼす影響を正しく予測することが困難であるばかりでなく、特定のパーソナル・インテグリティ全体の保持が一般的功利に及ぼす影響を正しく予測することはなおさら困難である。パーソナル・インテグリティの中心となるグラウンド・プロジェクトの多くは、長い期間にわたって維持され発展していくようなプロジェクトである。したがって、その周りに形成されるパーソナル・インテグリティも長い期間にわたって維持され発展していくようなものである。したがって、特定のパーソナル・インテグリティを保持することが一般的功利に最終的にどのような影響をもたらすかを定めるためには、少なくとも一定の期間が必要となる。すると、ある一次的動機が一般的功利に反しているということがわかったとしても、それがああるパーソナル・インテグリティの構成要素である場合には、その動機を排除すべきであるとすぐに結論することはできない。というのは、その動機が欠けるとそのパーソナル・インテグリティの存続が危うくなるかもしれないし、そして、そのパーソナル・インテグリティの存続と発展が長い年月の間に大きな一般

的功利を生み出すかもしれないからである。階層的動機付け功利主義を採用している人は、このようなことを考慮して、ある一次的動機が一般的功利に反していると思っても、その動機が特定のパーソナル・インテグリティの構成要素である場合には、すぐにはその動機に基づく行為を差し控えようとは思わないであろう。このようなことを考慮すれば、階層的動機付け功利主義が許容する一次的動機の範囲はかなり広いものになるし、したがって、それが許容するパーソナル・インテグリティの範囲も決して狭くはならない。

しかし、それでも、階層的動機付け功利主義に従えば、多くの一次的動機が排除されるかもしれない。そして、その結果それらを構成要素とするパーソナル・インテグリティがすぐさま解体するという懸念が生まれるかもしれない。しかし、一次的動機の排除とそれを構成要素とするパーソナル・インテグリティの解体との関係はそう単純なものではない。パーソナル・インテグリティの構成要素には、そのパーソナル・インテグリティの存続に特に重要なものとさほど重要でないものがある。たとえば、パーソナル・インテグリティの中心となるグラウンド・プロジェクトとそれと密接に関係している構成要素は、パーソナル・インテグリティの中心部分を形成しており、そのパーソナル・インテグリティの存続にはなくてはならないものである。一方、その他の構成要素は、そのパーソナル・インテグリティの周辺部分を形成していて、そのような構成要素の入れ換えはそのパーソナル・インテグリティの存亡にはさほど影響を与えない。つまり、周辺部分を形成している構成要素の入れ換えがあっても、そのパーソナル・インテグリティ全体は消滅することなく、少しずつ形を変えながら維持される。したがって、階層的動機付け功利主義に従うことによって、一定の動機が排除されるとしても、その動機がパーソナル・インテグリティの周辺部分の構成要素であれば、その排除がそのパーソナル・インテグリティを完全な崩壊にまで至らせることはない。このようなことを考慮すれ

ば、階層的動機付け功利主義が許容するパーソナル・インテグリティの範囲はかなり広くなると言えるであろう。

階層的動機付け功利主義は極度に狭い範囲のパーソナル・インテグリティしか許容しないという問題には以上のように答えることができる。しかし、この問題の他に、パーソナル・インテグリティを重視する立場からさらに次のような問題が出されるかもしれない。階層的動機付け功利主義は、一次的な動機のレベルでは人称的な視点を許容するが、二次的な動機のレベルでは非人称的な視点を要請する。すると、二次的な動機のレベルでの非人称的な視点が一次的な動機のレベルに干渉し人称的な視点を言わば曇らせ、その結果パーソナル・インテグリティを崩すように作用するのではないか。<sup>(17)</sup>

この問題には次のように答えることができる。まず、階層的動機付け功利主義を採用した人は、前述のように、個々の一次的動機をその都度功利主義的な思考によって選択することの弊害と困難さを考慮し、そのような仕方では一次的動機を選択することはしないであろう。したがって、その人が二次的な動機のレベルで取る非人称的な視点が頻繁に一次的な動機のレベルに干渉することはないであろう。さらに、階層的動機付け功利主義が要請する二次的な動機が一次的な動機のレベルに干渉するとしても、それはあくまで間接的な干渉でしかない。たしかに、一次的動機のレベルで功利主義的な思考が働けば、それが人称的な他の一次的動機と直接競合し対立することもある。しかし、二次的な動機のレベルでのみ功利主義的な思考が働いているかぎり、それが一次的動機と直接競合したり対立したりすることはない。したがって、階層的動機付け功利主義が要請する功利主義的な思考は、一次的動機を直接妨害することはない。

この問題には、さらに続けて次のように答えることもできる。二次的な動機として働く功利主義的な思考への意識の度合いを減せば、二次的な動機の一次的な動機のレベルへの干渉の程度はますます弱くなるであろう。たと



えば、功利主義的な二次的動機を内面化し一種の性向とすることによって、いちいち意識せずともその二次的動機が働くようにすることは可能である。たとえば、親切な人になりたいという二次的動機を持っている人は、自分が親切な人になりたいということを常に意識しているとはかぎらないし、自分のしようとする行為が親切な行為かどうかをいちいち意識的に吟味して自分の行為を選択するとはかぎらない。その人はむしろ、親切な行為へと導くような一次的動機に基づいて行為しようという気持ちを内面化し、それをひとつの性向という形で身につけていると考えることもできる。これと同じように、功利主義的な二次的動機を内面化しひとつの性向として持つことは可能であろう。そうであるとすれば、階層的動機付け功利主義は、そのような性向としての（功利主義的な）二次的動機の在り方を要請し、（功利主義的な）二次的動機への意識の度合を減らすことによって、二次的動機の一次的動機への干渉という問題を回避することはできないか。<sup>(18)</sup>

二次的動機の一次的動機のレベルへの干渉という問題の他に、さらに、次のような問題が出されるかもしれない。階層的動機付け功利主義を受け入れた人のパーソナル・インテグリティは、それ自体すでに崩れている。その人は、二次的な動機のレベルでは非人称的な視点を取りながら、一方で、一次的な動機のレベルでは非人称的な視点とは相入れない人称的な視点を取っている。このようなあり方は自己分裂に他ならない。したがって、その人はそもそも初めからパーソナル・インテグリティを失っている。<sup>(19)</sup>

これと似た次のような問題も提出されるかもしれない。階層的動機付け功利主義を受け入れた人の二次的な動機のレベルでは、功利主義的な思考が働いている。したがって、そのレベルでのその人の価値判断は功利主義に基づいている。そして、そのレベルでのその人の動機付けは功利主義的な思考によって行われる。一方、その人の一次的な動機のレベルでは、功利主義的な思考が働いているとはかぎらない。その場合に、その人は、一

次的な動機のレベルでは非功利主義な価値判断を行い、それによって動機付けられることになる。このような状態は自己分裂に他ならない。したがって、その人はそもそも初めからパーソナル・インテグリティを失っている。

これらの非難は、二次的動機と一次的動機の間を見逃していることから生ずるように思われる。階層的動機付け功利主義を受け入れた人の二次的動機と一次的動機とは相互にまったく独立して存在しているわけではない。その人の動機付けのシステムにおいては、二次的な動機のレベルで働く思考は一次的動機を正当化したり許容したりする働きをしているのである。したがって、その人の立場から見れば、二次的動機と一次的動機は正当化するものと正当化されるもの、あるいは、許容するものと許容されるもの、という関係を保っている。さらに、その人が特定の一次的動機に基づいて行為を行う場合には、その一次的動機から供給されるその行為の理由が存在するであろうが、しかし、同時にその行為は二次的動機からも理由付けされるような行為である。したがって、その人から見れば、その行為は単にその一次的動機によって動機付けられているばかりでなく、同時に二次的動機によっても（間接的な仕方ではあるが）動機付けられている行為として現れるのである。このように、階層的動機付け功利主義を受け入れている人の二次的動機と一次的動機の間にはインテグリティが存在するのである。したがって、階層的動機付け功利主義を受け入れることが、それだけで自己分裂を引き起こすことはない。

最後に、次のような問題を考えてみよう。以上の階層的動機付け功利主義の説明の中では、パーソナル・インテグリティは単に一次的な動機のレベルだけで形成されるものとして扱われてきた。しかし、いくつかの動機のレベルにまたがって形成されるパーソナル・インテグリティも存在するのである。たとえば、二次的な動機のレベルにグラウンド・プロジェクトがあり、それが一次的な動機のレベルの要素を統合しているという形を取

っているパーソナル・インテグリティも存在するであろう。もし、階層的動機付け功利主義を受け入れようとしている人が、このようなパーソナル・インテグリティを持っていたら、二次的な動機のレベルでそのグラウンド・プロジェクトと功利主義的な思考が競合して、その結果その人のパーソナル・インテグリティが崩れてしまう。

この問題には次のように答えることができる。たしかに、いくつかの動機のレベルにまたがって形成されるパーソナル・インテグリティも存在する。むしろ、そのようなパーソナル・インテグリティの方が一般的かもしれない。そして、そのようなパーソナル・インテグリティの中心となるグラウンド・プロジェクトが高次の動機のレベルで（階層的動機付け功利主義が要請する）功利主義的な思考と競合し、その結果そのパーソナル・インテグリティが崩れてしまうかもしれない。しかし、その場合には、階層的動機付け功利主義は、そのグラウンド・プロジェクトが存在するレベルよりも高い動機のレベルで功利主義的な思考を採用するように要請するであろう。つまり、階層的動機付け功利主義は、功利主義的な思考をひとつ高い動機のレベルに置くことによって、より低い動機のレベルで成立しているパーソナル・インテグリティを崩さないようにしようということを意図した考え方なのである。

以上、階層的動機付け功利主義に対してパーソナル・インテグリティを重視する立場から出されることが予想されるいくつかの問題に答えた。しかし、それでもパーソナル・インテグリティを重視する立場から、階層的動機付け功利主義はパーソナル・インテグリティを十分尊重していない、という反論が出されるかもしれない。たしかに、一般的功利に明らかに反するようなパーソナル・インテグリティがあるかもしれないし、功利主義的な思考を一切受け付けないパーソナル・インテグリティもあるかもしれない。おそらく、階層的動機付け功利主義を受け入れるためには、このようなパーソナル・インテグリティは排除しなければならないであろう。し

たがって、階層的動機付け功利主義は、ある種のパーソナル・インテグリティを尊重することができないことは確かである。

しかし、あらゆるパーソナル・インテグリティを無条件に尊重すべきなのであろうか。尊重すべきだと答える人は、おそらく、非人称的な視点を取ることを一切拒むような方向へと向かうであろう。もちろん、その人は、階層的動機付け功利主義が要請する功利主義的な視点に問題があると言うかもしれない。しかし、第二節で述べたように、パーソナル・インテグリティと功利主義的な思考が対立するとすれば、その原因は功利主義的な思考が要請する非人称的な視点にある。したがって、功利主義の代わりに、他の道德の理論（たとえば、カント的な道德の理論）を持ってきても、その理論がなんらかの仕方で非人称的な視点を要請するとすれば、その人は、その理論を受け入れることはしないであろう。非人称的な視点を一切拒否するこのようなパーソナル・インテグリティ至上主義者が支持する道德の理論とはどのようなものであろうか。その理論の明確な像を描くことはできないが、その理論は、非人称的な視点だけを常に要請するような（ウィリアムズが攻撃した単純な）功利主義が偏りを持っているように、それとは逆の偏りを持っているであろう。おそらく、道德の理論を少しでも発展させるひとつの道は、そのような偏りをなくし非人称的な視点と人称的な視点を調和させるという方向に開けるように思われる。階層的動機付け功利主義は、功利主義という枠の中でという限定はあるが、そのような調和を実現する糸口を示しているように思われる。

#### 注

本稿は1994年3月に金沢大学で開催された日本イギリス哲学会第18回研究大会における研究発表の原稿に加筆したものである。

- (1) Williams 1973.
- (2) Williams 1976.
- (3) パーソナル・インテグリティという概念やそれと類似した概念に基づく功利主義批判を展開しているものとしては Stocker 1976; Wolf 1982; Wilcox

1987; Kapur 1991, その批判への反論としては Conly 1983; Brink 1986; 1989; Chap. 8, Sec. 17; Kagan 1989: Chap. 8 & 9, その批判をある程度受け入れ, より洗練された理論を提出しているものとしては Scheffler 1982; Railton 1984 などがある。

- (4) 多元的功利主義に関しては Brink 1989: Chap. 8 や Railton 1984: 148-150 を参照。
- (5) ブリンクは Brink 1986: 435-436; 1989: 281 でパーソナル・インテグリティに基づく功利主義批判への以上のような対処の仕方を示している。
- (6) パーソナル・インテグリティ一般の分析としては, McFall 1987 などがある。
- (7) Williams 1976: 12-13.
- (8) この解釈はパーソナル・インテグリティとグラウンド・プロジェクトの関係を強調しすぎているかもしれない。しかし, Williams 1973: Sec. 5 と Williams 1976 の叙述を整合的なものとして捉えると, このような解釈も成り立つ。たとえば, Williams 1973: 116 でウィリアムズは「大事なものは, 彼 [功利主義の要請の対象となる人物] が, 自分が最も深いレベルで時として真剣に考えているプロジェクトや態度から発したものであるとして, つまり, 自分の人生がそこにかかっているものとして, 自分の行為を自分と一体化している, ということである」と述べている。そして, 功利主義はこの事実を無視して, 自分の行為を功利計算の単なる対象として見ることを要請し, 自分と一体化している行為とは異なる行為を命ずる, と主張する。さらに, ウィリアムズは, その要請は「彼の行為や彼の行為の源泉から, 彼を本当の意味で遠ざける alienate」(116) ような要請であると述べ, その要請は「彼のインテグリティを本当の意味で侵すことになる」(117) と結論する。以上の叙述の中で問題にされているプロジェクトとはウィリアムズが Williams 1976 の中でグラウンド・プロジェクトと呼んでいるプロジェクトと同じものである。そして, 以上の叙述から, ある人のグラウンド・プロジェクトから発した行為からその人を引き離す時に, その人のパーソナル・インテグリティが崩れる, とウィリアムズが考えていたことがわかる。したがって, ウィリアムズが念頭においているパーソナル・インテグリティとは, グラウンド・プロジェクトを中心に形成されているひとつのまとまりである, という解釈が成り立つ。

さらに, この解釈では, パーソナル・インテグリティの構成要素を, 行為ばかりでなく, 目標や欲求, 感情や動機まで含めたものとみなしている。これは一種の拡大解釈かもしれない。しかし, Williams 1976 の中で愛情や友情に基づく関係に関する叙述などから, ウィリアムズは, パーソナル・イ

ンテグリティの構成要素として行為ばかりでなく欲求や感情や動機をも含めていることがわかる。さらに、Herman 1983: 233 や Piper 1987: 103 も同様な解釈を採っている。

- (9) ウィリアムズのパーソナル・インテグリティに基づく功利主義批判の論点  
が、功利主義が非人称的な視点を要請し、それが人称的な視点を阻止する  
という点にあることは、「功利主義は、グラウンド・プロジェクトを持っている  
人に、そのグラウンド・プロジェクトのためになくしてはならないことが功  
利最大化を目指す非人称的な人としてその人がしなければならないこととぶ  
つかる場合には、(中略) それだけで前者を諦めるように要請するであろう。  
これは、全くばかげた要請である」(Williams 1976: 14) という叙述や  
Williams 1976: 3-5; 1973: 116 の叙述からもわかる。さらに、Herman  
1983: 233; Scheffler 1982: 43; Brink 1986: 423; Piper 1987: 102-103 な  
ども同様な解釈をしている。
- (10) この点に関しては特に Williams 1973: 115-117 を参照。Conly 1983 はウ  
ィリアムズの功利主義批判のこの論点を見逃しているように思われる。
- (11) Kagan 1989: Chap. 8 や Nagel 1986: 201-202 もこの問題に触れている。  
さらに、この問題は道德の理論と動機付けの関係に関する内在主義と外在主  
義の論争に関係する。内在主義によれば(一定の条件下にいる)ある人があ  
る理論に従って判断を下す場合に、そのことだけでその人がその判断が要請  
する行為へと動機付けられなければ、その理論は道德の理論としての資格を  
失う。一方、外在主義によれば、そのような動機付けの力を持っていないと  
もその理論は道德の理論としての資格を失うことはない。外在主義が正しい  
とすれば、たとえば、功利主義は強制力 sanction によってこの動機付けの  
問題を解決できるかもしれない。しかし、内在主義が正しいとすれば、功利  
主義はこの問題を正面から受けることになる。
- (12) この問題に関しては Scheffler: Chap. 3; Nagel 1986: 198; Kagan 1989:  
258-270 を参照。
- (13) この問題に関しては Stocker 1976; Wolf 1982; Kagan 1989: 358-362 を  
参照。
- (14) Railton 1986: 152-153. レイルトンは、功利主義に限定せず、帰結主義一  
般について語っているが、ここではレイルトンの議論を功利主義に適用して  
要約した。
- (15) Herman 1983: 236-240; Baron 1984: 207-209; 成田 1993 を参照。
- (16) このことは Railton 1984: 153-154 でも言及されている。
- (17) この懸念はウィリアムズが 'one thought too many' という言葉を用いて

- 表そうとした懸念と同じものである。Williams 1976: 18.
- (18) 功利主義の枠の中ではないが、二次的な動機への意識の軽減と内面化の重要性を強調したものとして、Baron 1984 や Piper 1987 を挙げるができる。
- (19) このような自己分裂については、Stocker 1976: 453-455; Wilcox 1987 を参照。

#### 参考文献

- Baron, Marcia. 1984. "The Alleged Repugnance of Acting from Duty." *The Journal of Philosophy*. Vol. LXXXI: 197-220.
- Brink, David. 1986. "Utilitarian Morality and the Personal Point of View." *The Journal of Philosophy*. Vol. LXXXIII: 417-436.
1989. *Moral Realism and the Foundations of Ethics*. Cambridge U.P.
- Conly, Sarah. 1983. "Utilitarianism and Integrity." *The Monist*. Vol. 66: 298-311.
- Herman, Barbara. 1983. "Integrity and Impartiality." *The Monist*. Vol. 66: 233-250.
- Kagan, Shelly. 1989. *The Limits of Morality*. Oxford U.P.
- Kapur, Neera Badhwar. 1991. "Why It Is Wrong to Be Always Guided by the Best." *Ethics*. Vol. 101: 483-504.
- McFall, Lynne. 1987. "Integrity." *Ethics*. Vol. 98: 5-20.
- Nagel, Thomas. 1986. *The View from Nowhere*. Oxford U.P.
- Piper, Adrian. 1987. "Moral Theory and Moral Alienation." *The Journal of Philosophy*. Vol. LXXXII: 102-118.
- Railton, Peter. 1984. "Alienation, Consequentialism, and the Demands of Morality." *Philosophy and Public Affairs*. Vol. 13: 134-171.
- Scheffler, Samuel. 1982. *The Rejection of Consequentialism*. Oxford U.P.
- Smart, J. J. C. & Williams, Bernard. 1973. *Utilitarianism For and Against*. Cambridge U.P.
- Stocker, Michael. 1976. "The Schizophrenia of Modern Ethical Theories." *The Journal of Philosophy*. Vol. LXXIII: 453-466.
- Wilcox, William, H. 1987. "Egoists, Consequentialists, and Their Friends." *Philosophy & Public Affairs*. Vol. 16: 73-84.
- Williams, Bernard. 1973. "A Critique of Utilitarianism." In Smart & Williams.

1976. "Persons, Character and Morality." In Williams 1981.

1981. *Moral Luck*. Cambridge U.P.

Wolf, Susan. 1982. "Moral Saints." *The Journal of Philosophy*. Vol. LXXIX: 419-438.

成田和信. 1993. 『義務による動機付けと感情による動機付け』日本倫理学会 倫理学年報 第42集.